

◆民俗音楽の中の非日常性(つづき)

d) 祭の中の「神」

音や音楽はしばしば日常と非日常をつなぐものとして機能する。その典型的な場が祭りであり、祭りは大抵、神に対する祈りや感謝の現れとして、神にささげるものとして行われている。だが祭りの中には、しばしば神自身が登場することがある。人々の中の選ばれた者が、そのときだけ神になるのである。

例 1: 石巻の牡鹿法印神楽「磐戸開」

*日本における音楽(芸能)の最古の記述は『古事記』に出てくる天岩戸の逸話である。そこでは洞穴に閉じこもった天照大神の興味を引くため、女神アメノウズメノミコトが桶の上で踊る。これが「かみのあそび」=神楽(かぐら)の始まりとされ、各地の神楽の中にも演目として残っている



例 2: 奈良坂の翁舞

*「翁」は能や歌舞伎など日本の芸能で広く共通して演じられる仮面舞踊であり、本来は宗教的な性格を帯びていたものと考えられている。民俗学者折口信夫はそのルーツを南島の芸能に見たが、それが日本各地に伝わり芸能として伝承され、さらに田楽や能へと発展したと考えられる。奈良坂の翁舞は、そうした民俗的な「翁」の一つである



例 3: アフリカ(マリ)ドゴン族の仮面舞踊

*西アフリカのマリ共和国に住むドゴン族の人々は、独自の神話体系を持っており、その神様を象徴するようなさまざまな仮面を用いた祭礼がよく知られている。20 世紀西洋の美術にも影響を与え、ミュージカル《ライオン・キング》の演出にも影響を与えたと言われている。



例 4: 中国雲南省イ族のたいまつ祭り

*中国雲南省には多くの少数民族があり、独自の文化を守り継いでいる。イ族もその一つで、独自の文字や神話はピモと呼ばれるシャーマンたちによって伝えられている。「たいまつ祭り」では、若者たちがそれぞれの扮装で精霊たちを演じ、ピモの語る創世神話を演じていく。興味深いのは、獲物をつかまえる道具として神様から授かった弓から楽器が生まれ、それが神様を讃える音楽を奏でる、というストーリーで、この祭り自体の中に、音楽のはじまりや音楽の非日常的な力の根拠が語られているのである。



* 多神教と一神教

多神教

数の神々を同時に崇拝する宗教。神道、古代ギリシアの宗教、ヒンドゥー教など。農耕社会に多くみられる。神々と人間は同じ世界にいる。従って人が身に扮することが可能。

一神教

一の神を崇拝する宗教。一般に一神教の神は抽象的で、全知全能の創造主と考えられることが多い。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教など。

神は世界の創造主であり、人間の世界の外にいる。従って人が神に扮することはできない。